

特定非営利活動法人(国税庁認定)
柔道教育ソリダリティー

第11回講演会

第一部

「震災を柔の心で乗り越える」

―宮城県石巻柔道協会からの報告―

第二部

「柔道を通じた日露交流を語る」

―松前重義博士からフーチン首相まで―

2011年12月5日(月)

於 東海大学校友会館

― 本日は師走にもかかわらず、多くの方々にお越しいただきましてありがとうございます。司会を務めさせていただきます。光本です。まず、橋本敏明副理事長よりあいさついたします。

橋本副理事長あいさつ

NPPO法人柔道教育ソリダリティーの副理事長を務めさせていただいております橋本です。本日は第11回講演会を開催しましたところ、お忙しい中を大勢の皆さまにご参加い

ただき、心より感謝申し上げます。

本講演会は恒例の年2回開催のうちのひとつで、毎年末に開かせていただいているものです。今年は震災がありましたので、被災地からの報告として、私どものNPPO法人の活動の中でも震災ボランティアに関することなどを、また山下泰裕理事長から本NPPO法人立ち上げから今日に至る柔道を通じた日露交流についてお話したいと思えます。

はじめに、第一部「震災は柔の心で乗り越える」として、宮城県から石巻柔道協会会長の木村清徳さま、同じく宮城県から寺澤豊志さまを迎え、お話いただきます。

皆さま方もご存じと思いますが、河北新報社が出版した『河北新報のいちばん長い日』という本を読ませていただきました。まさに地元である河北新報が、震災の困難の中でいかに新聞を発行し続けたかの記録ですが、内容はやはり涙なくして読めないものでした。

この後のお話に先立ち、この本のあとがきから一部を紹介させていただきます。あとがきは、編集局長の太田巖さんという方が書かれたものです。「2011年3月11日午後2時

46分、三陸沖を震源に発生したマグニチュード9・0、最大深度7の激震は、巨大津波、原発事故、放射能汚染を引き起こし、私たちの東北に甚大な被害をもたらし」と始まり、これを受け、この言葉が今の現状を示していると思いますが、「今も私たちの東北は大震災の只中にある」と書いておられます。今日、この後に木村先生、寺澤先生からその一端がお話になられると思えます。

河北新報は新聞特集を組む時に、「阪神淡路大震災は“がんばろう神戸”というキャンペーンのフレーズでゼロからのスタート。しかし今回の東日本と東北の震災は、ゼロからではなくマイナスからのスタートになる」と考え、“踏ん張ろう”というフレーズで特集を組まれたそうです。

私たちも踏ん張っておられる被災地の皆さまを何とかサポートしたい、連帯の気持ちを示したいということ、柔道を通して何かできないかと活動をさせていただいています。その点につきましても、この後、お話いただけると思えます。

私たちの活動は、ご存じのように「柔道・友情・平和」の精神を示すさまざまな活動です。針で刺したくら

いの点の活動です。それも皆さまの平素からのご支援・ご協力で成り立っているものです。今回の震災に対しても、点の活動をさせていただきました。願いは、1個の点が線となり、やがて面となつて大きな希望を与えることができたら本当にうれしいと思います。本法人といえども山下先生が理事長、私が副理事長で、事務局は大学の研究室であり、女性が二人いるだけのまさに点のような組織で、皆さまお一人お一人の温かいご支援で活動しております。ささやかな活動ですが、柔の心で点を線にし、面にしていけたらと思っております。ぜひ今後ともよろしくご指導・ご支援をよろしくお願い申し上げます。

では、これから宮城県石巻市を中心としたお話を木村先生と寺澤先生から伺いたいと思います。よろしくご清聴のほど、お願いいたします。

―では、NPPO法人柔道教育ソリダリティー第11回講演会の第一部を始めます。まず、東海大学柔道部OBであり現在、宮城県の豊里柔道クラブで顧問をされている寺澤豊志先生からご講演いただきます。

第1部「震災を柔の心で乗り越える

—宮城県石巻柔道協会からの報告—

寺澤豊志氏

(全日本柔道連盟柔道ルネッサン
又特別委員会都道府県部会長、株
式会社豊蔵コーポレーション代表
取締役)

ただいまご紹介いただきました寺澤です。今日は、宮城県内から午後3時26分の新幹線に乗ってまいりました。仙台は紅葉が終わった季節で、福島に差し掛かると夕焼けがとてもきれいで、東京に近付くと今度は富士山が美しく、「福島の方々はこのきれいな夕焼けに気付いているのだろうか」と考えました。

3月11日の震災後は、宮城は例年ですと桜が4月10日前後の開花なのですが、桜が咲いていることも気付かずにおりました。ある人に「桜が咲いているね」と言われ、見ても何も感じない。美しいとかきれいとかいうのは、心が感じるものです。新幹線の中で、苦難にあつた福島や宮城の人たちのことを思いながらこの場所に参りました。

3月11日以降、私自身の人生に対する考え、幸せの価値観などは大

きく変わりました。今、こうして皆さんの前で、温かい服を着て明るい電気の中で話せることがひとつの幸せだと感じています。震災が起きた時には電気は消え水道は止まり、電話は不通。3日も4日も経ってメールがたくさんきて「どうしてこんなに騒ぐのかなあ」と思ったものでした。

私たちは内陸なので、被害は地震だけ。テレビが見られないもので、津波のことを知ったのは4〜5日後のこと。たまたま電話で連絡がついたのが橋本先生でした。「寺澤、大丈夫か？橋本は生きているから、皆によるしく伝えてくれ。皆を助けてくれ」というのが最初の言葉だったと、今でも覚えています。

南三陸町は志津川湾に面した海のかきれいなところですが、そこで私の友人も犠牲になりました。家族を亡くされた人も多くいるし、友人からは「あんなに大好きだった海が憎らしい」という言葉を聞きました。友人の震災後の人生はそこから始まったわけですが、妻と親を亡くし、親類も亡くしたことに對する悔しさ、虚しさ、家も仕事も失ったことからの

「海が憎らしい」という言葉でした。先ほど橋本先生が河北新報の本

を紹介されましたが、今回の震災で石井光太さんが著した『遺体―震災、津波の果てに』(新潮社)という本があります。陸前高田で遺体収容に当たった市の職員、葬儀社、消防団員、歯科医、自衛官、海上保安官などを取材し、まとめたものです。その中に、こういう言葉がありました。

「歯科医は遺体安置所で目を開かない妻に向かって、“早く起きろ、帰るぞ！”と叫んで泣き崩れる夫を目の当たりにする。葬儀社勤務のある民生委員の男性は、安置した妊婦の遺体に“ママのおかげでお腹の赤ちゃんは寒くなかったんじゃないかな？天国でこの赤ちゃんを産んであげるんだよ”と語りかける。どす黒く変色した母の遺体に経験を生かして死化粧をしてあげる。また、市の生涯スポーツ課から遺体搬送班へ異動を命じられた職員は、変わり果てた遺体を見て泣きじゃくる家族も、心の底では遺体でも帰ってきて欲しいと願っていたことを痛感する」これらの人々を取材して著者は、「震災後間もなくメディアは示し合わせたように一

斉に復興の「のろし」を上げました。“がんばろう！”“がんばれ！日本！”しかし、現地にいる身として

は被災地にいる人々が数えきれないほどの死を認め、血肉化する覚悟を決めない限り、それはありえないことだと思つた」とのことが書かれています。

12月11日で、震災から9カ月になります。その中でも毎日毎日安否の情報が載っています。私は戦後の生まれで、よく親から「疎開」や「訪ね人」という言葉を聞きましたが、宮城県の遺体安置所では、まだまだこういうことが続いています。ほんとうにかわいそうな話ばかりが、どのページにも載っています。

その中には「被災者は今」という被災地の方の特集があります。宮城県気仙沼市の方の言葉に、「東日本大震災前の2月、ひとり娘が病気で亡くなりました。悲しみに沈んでいるうちに震災が起き、夫も家も流されてしまいました。今は気仙沼市の仮設住宅にひとり住んでいます。寂しいです。夜もあまり眠れず、涙が出てしまうことも少なくありません」62歳の方ですが、これがまさに今の現実なのです。

私の柔道の教え子で、東海大学を出た子が今は警察官をやっており、3歳の子どもが40日間行方不明の

後に亡くなっていました。通夜に行きたくないなと思いがら行きましたら、お祖父さんも皆が「うちの孫は見つかりましたよ」と喜んでる。そして火葬して葬儀して、それは異常なことです。そのような異常な世界が繰り広げられたのが、震災後でした。

震災の後の物質不足は、親から聞いて言葉だけ知っていたまさに「配給」状態でした。水道から水が出た時の喜び、電気が点いた時の喜び、食料が届いた時のうれしさ、自動車のガソリンが自由に見える喜びなど、ひとつひとつが喜びとなりました。私自身が幸せとは何かと考え、「いつも通りのこと」が幸せなのだと思付かされたのです。

そんな中で、昨日も筑波大学の山口香先生が女川町で柔道教室を開かれ、その前に山下先生、井上康生先生も柔道教室を開催して下さいました。被災後、いろいろな方が避難所にみえます。歌やら民謡やら、最初はそれが何の励みになるのか、私たちは物資が欲しいとの思いでいきましたが、だんだん気付いてきたことがあります。

山口先生と女川町の仮設住宅を

暑い最中の7月に訪問し、体育館に段ボールの仕切りだけで退屈そうに不安そうにしている被災者に向かつて木村先生が「女三四郎が来たんだぞー！」と言うと、皆来るのです。彼女がいる間中、一緒に写真を撮ったり話したり、皆がニコニコしている様子を見て、いろんな人がいろんな形で来ることが励ましになるのだと実感し、私自身が反省した次第です。

物資というものは、欲しいものがどんどん変わってきます。東北の3月はまだまだ寒い。そこに熊本ご出身の八代亜紀さんは畳を何千枚も寄付してくれました。石川さゆりさんは地方の民謡を歌って励ましてくれました。そのように、様々な方が何かをしようと行動してくれることが大事だということを、今回の皆さんの活動でも感じています。

宮城の学校は落ち着いてきました。今は畳が足りなくなりましたので、これからは畳や柔道着へのご協力もどうぞよろしくお願いします。

さて、私は「全日本柔道連盟柔道ルネッサンス特別委員」として都道府県部長を仰せつかっています。10年前、柔道でも勝ち負けが表に出てしまい、会場の後片付けのマナーの無

さや審判へのヤジといったように礼儀作法が失われたということで、柔道の原点に帰ろうと、山下先生を委員長として始まった活動です。今年で解散となるわけですが、私としては今こそ「ルネッサンス」が大切だと感じています。

震災後、いろいろな醜いことも目にしましたが、人間とは、日本人とは優しいんだなと思わせるような相助ける「相助」の気持ちが多く見ました。それを柔道に置き換えれば、嘉納治五郎師範が明治5年に創設した柔道には「精力善用・自他共栄」という言葉があるではないか、ということ結び付いたわけです。私自身、柔道の指導を30数年やってきて、果たして教え子たちに「自他共栄」の心を教えられたかと反省もありますが、やはり我々柔道にかかわる者は、「精力善用・自他共栄」が常に柔道の根本の精神の中にあるのだということを肝に命じて指導しなければならぬと思います。

南三陸町の友だちは、「今はもう海と仲直りしたい」と言っています。いよいよ、気持ちの整理がついて復興へ向かうのではないかと思います。一週間ほど前の新聞に、「地震も恐か

った。津波も恐ろしかった。でももっと怖いのは、この東日本大震災が忘れ去られようとしていることだ」と仙台の中学2年生の言葉が紹介されていました。被災の戦いはまだまだ続きます。皆さまのいろいろな思いが、私たちの活力になります。今後、よろしくお願い致します。ご清聴、ありがとうございます。

— ありがとうございます。では、続きまして、宮城県石巻柔道協会からの報告として、石巻柔道協会会長の木村清徳先生からお話いただきます。木村先生は「自身も柔道場をお持ちでしたが、津波にさらわれました。が、現在はまた再開しています。お話を先立ち、石巻市が作成したDVDを5分ほどご覧いただきます。

木村清徳氏

(石巻柔道協会会長、木村柔道館館長、NPO法人石巻市体育協会副会長、石巻市スポーツ少年団本部長)

(DVD上映、ナレーション)

・・・地震が発生してから20分くらい

で水面がすぐ上がり始めて港が見えなくなった。それから 10 分くらい経って今度は水がどんどん引いて行った。地震が発生してから 40 分くらいして海峡が空になって、南と北から津波がすごい音を立てて押し寄せて来て、目の前で大衝突した。それを見た時には膝がガクガクして現実のものかどうか信じられなかったですね。

：ペランダから海の方を見ると、黒い波がどんどん押し寄せて来るのが見えました。3 時 50 分くらいだったでしょうか。私が見たのは、おそらく第二波か三波くらいの津波だったかと思いますが。海の黒いのと、雪が降っていて白いのと、炎の真っ赤なのと、煙の灰色の濁ったのと、地獄のような光景が広がっていました・・・

— 大変申し訳ございませんが、時間の関係上、残念ですがここまでの上映といたします。それでは、木村先生、お願いします。

ただいまご紹介にあずかりました石巻柔道協会、体育協会などを通じてスポーツ・柔道活動をしております木村と申します。また個人道

場を開設して 32 年目になりました。今日は理事長の山下先生にお招きいただき、このようにお話する機会を与えていただき、ありがとうございます。

ただ今、石巻地方沿岸部の大津波と被災地の映像をご覧いただきました。3 月 11 日午後 2 時 46 分、宮城県沖を震源とするマグニチュード 9 の大地震とそれに続く巨大津波の襲来で、石巻を中心とする東北 3 県の沿岸部は広範囲にわたり壊滅的な被害を受けました。中でも最も大きな被害を受けたのが石巻地方を中心とする沿岸部で、石巻圏域の西山町では死者・行方不明者が 8 000 人を数え、家族や家や仕事を失った多くの被災者は心身ともに疲弊し、生きる目標を失っているのが現状です。

それだけに被災地の復活・復興は世界中の人々の注目の的であり、石巻にも暖かい支援の手が差し伸べられています。

石巻の沿岸部で中心の町からかなり離れている私のところに津波が来たのは 2 時間くらい経ち、空は薄暗くなりボタン雪がしとしと降る夕方 5 時ごろでした。大津波は何度も繰

り返し、波は引かず、一晚中続いたと思います。道場前の路上は 1 メートル 50 センチくらい浸水し、基礎を高くしている私の道場でも床上 60 センチまで水が来てその状態が 4 日間も続き、完全に水が引いたのは 1 週間もしてからだったと思います。道場を心配する多くの友人や柔道の門下生・父兄が来てくれました。中には「途中まで来たけれど浸水で入れなかった」と想像をはるかに上回る津波の恐ろしさを語っている人がいました。

この津波で、私の門下生とその家族は運が良いことに全員無事でしたが、他では柔道の仲間たちや子どもたち、その家族多数が犠牲になったことを知り、涙が止まりませんでした。

テレビや新聞で取り上げられた石巻市の大川小学校には、私の門下生が 2 人いました。彼らは地震直後に迎えに行った母親の賢明な判断で助かりましたが、そのことを母親が書いていますので紹介します。

「・・・3 月 11 日午後 2 時 46 分、地震発生。北上川上流の自宅から学校の校庭に着いたのは午後 3 時 10 分ごろ。学校までの道路には亀裂が入

り、ぽつきり折れていた。校庭には児童・住民ら 200 人以上がいた。ずいぶん雪が降って来て、先生方も頭から濡れていた。教頭先生が学校の裏山を指差し、「この山に子どもたちを登らせたら大丈夫ですか、崩れる山でしょうか」と住民に問いかけている姿が、今でもはつきり頭に浮かんでいます。住民たちは教頭先生の問いかけには無反応だった。我が子を引き取り、車に乗せて学校を出た 3 時 20 分ごろ、新北上大橋を通り過ぎて道路が折れたあたりで警官に止められ、大川小に戻るよう指示されたが、この先にある自宅に戻りたいと静止する警官とやりとりが続いた。警官に「じゃ、勝手にしろ」と言われ、そこを通り過ぎて自宅へ着いた時だった。大川小の方から「津波だ！津波が来た！」。車が何台も

すごいスピードで北上川上流の方向に流れていった。私たちの家族はそれを聞いて、すぐ車で例の裏山へ登った。自宅のある集落に津波は来なかったが、とても大きな余震が何度もあり、津波警報がずっと出ていたので、その裏山で車中 2 晩過ごした。大川小の大惨事を知ったのは、地震から 3 日後だった。全校生徒 108 人の 7 割に

当たる74人が死亡・行方不明になった。助かった34人の大半は、保護者が来て連れ帰ったケース。学校にいた教職員11人のうち10人が死亡・行方不明。校庭などに避難して来た多くの住民も死者・行方不明者は93名。この大川小のある釜谷山根地区の住民4割以上が亡くなりました。

大川小は町の学校と比べ児童数が少なかったため、子どもたちは学年を関係なく皆混ざって遊んでいました。家には子どもが4人いるので、平日は帰宅後、他の部落から家に遊びに来て溜まり場ようになっていた。子どもたちの笑顔や声があふれ、時に暴れているとおじいさんに怒鳴られたのに、震災以来、子どもの声が一切聞こえなくなりました。どこを見回しても子どもたちの姿はなく、聞こえて来るのは我が子4人の声だけです。まだ夢を見ているように現実を受け入れることができません。長女は震災以来、持病が悪化して激しい運動を医師から禁じられ、次男は未だにお友達の写真が写っているDVDや写真を見ることができません。手に余るほどのわんぱくぶりでいつも中心になって遊んでいたのに、ある日突然、自分の友だちが皆亡くなって

しまったのです。わずか10歳になるかならないかの子どもたちにとってこのような残酷なことが起きてしまいい、一体、大人たちはどうすればいいのでしょうか。ただ見守ることしかできないのでしょうか。震災から8カ月が過ぎ、町はどんどん以前のように戻り、1年も経たないのに人間の力はすごいと思いつつ、大川だけが置いて行かれるようで、忘れ去られるようで、「がんばれ！がんばれ！」とよく言われますが、何をどうすればよいのでしょうか。どうしたらよいのでしょうか、とつい愚痴を言ってしまう。それでも、生き残った親子で頑張つてやっついていくしかありません。本当は毎日笑顔もあります。ただ、文章にするとどうしても悲しいことばかりが思い出され、辛い内容になってしまいます。3年経っても5年経つても、10年経つても大川小の子どものことを忘れないで下さい・・・」

以上が門下生のお母さんの書いておられたことです。あの時、「大川小へ戻れ」と言った警官は、その後、津波に流されたそうです。また、せっかく助かったのに寒さで凍死した姿を側で見ていたなど生々しい話で、たい

へん辛い思い出です。多くの子どもたちは心に傷や多くの不安を抱え、生活をしています。石巻体育協会では震災直後からの混乱が続く中、役員の安否確認とともに会議を開き、石巻をスポーツで元気にすることを確認。4月27日には石巻総合スポーツクラブを結成しました。石巻柔道クラブはほとんど道場や練習場が使えなくなりまして、高校の道場を借りたりして、各単位団を超えて練習を再開したのは5月の中頃でした。私の道場も8月に入って修理が終わり、畳も敷いて9月1日から通常通りの練習を再開することができました。その間、多くの皆さまから励ましの言葉やご支援を賜りましたことに、心より御礼を申し上げます。

山下先生には、たいへんお忙しい中、6月と11月の二度、石巻を訪問していただきました。被災された方々にたいへん心を痛められ、石巻市長を表敬訪問し、石巻体育関係の役員、柔道関係者、子どもたちなど多くの皆さんにお会いしていただき、多くの皆さんにお会いしていただき、多くの皆さんにお会いしていただき、励の言葉をいただきました。そしてNPO法人柔道教育ソリダリティー主

催の「元気になろう！ 石巻柔道少年教室」では、「柔道は礼に始まり礼に終わる」という柔道精神の講話や、実技指導では井上康生さんも加わり世界の技を披露していただき、子どもたちは柔道教室を通じて元気で勇気もらい、この大震災にも負けず何かしら今後の夢に向かって頑張ってくれると思います。

また、NPO法人柔道教育ソリダリティーに寄せられたロシアのスポーツマンからの多額の義援金、中国・青島市柔道協会からの義援金など、石巻市体育協会、柔道協会へ贈呈していただきました。あらためてご厚意に感謝と御礼を申し上げますとともに、スポーツと柔道を通じて石巻の復旧・復興のため大切にに使わせていただき、役に立てたいと思います。また、多くの東海大柔道OB関係者の皆さまからも心温まる復興支援を賜りましたこと、東海大付属相模高校の林田和孝先生には、神奈川県からわざわざ畳を持って来ていただき、寄贈していただきました。石巻市では10月に石巻市武道協議会を設立、また11月には「武道の町・石巻」を宣言しました。被災直後、生

死を分ける極限状態の中にあつて大きな暴動もなく、限られた水や食料を分け合う礼儀正しい日本人の姿は、多くのマスメディアによって世界中に発信されました。その背景にあるのは、潜在的に培われた日本人の心のありようにあると考えます。

根底には、礼に始まり礼に終わるといふ武道精神があつたとも言われています。石巻市武道協議会は、こうした時代だからこそ素晴らしい精神文化を大切に継承して行くことが私どもの大切な使命であると考え、石巻体育協会が加盟する武道関連

8 団体で種目や流派を超えて団結し、次代を担う青少年に勇氣と希望、礼儀と協調性、優しさと思いやりのある伝統文化の継承と発展のために設立したものです。

また、東京都は2020年に行われるオリンピックを「復興オリンピック」として招致すると宣言しました。石巻市では、その招致を応援し協力したいと準備を進めています。2020年のオリンピックが実現した際には、壊滅的な被害を受けた被災地に復興のシンボルとなるスタジアムを建設し、そこで競技が開催されれば東北や被災地の復興に大きな役割を果

たすものと考えます。ぜひ応援していただきたいと思えます。

最後になりましたが、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長である山下先生をはじめ多くの方々へ感謝を申し上げ、報告いたします。ありがとうございます。

— ありがとうございます。

— それでは、第二部に移らせていただきます。当法人の交流会は今回で11回目となりました。これも皆さまのご理解・ご支援の賜物と感謝申し上げます。

今回、山下は、いつもはあまり話せないロシアの一面をお話したいということで、「柔道を通じた日露交流を語る 松前重義博士からプーチン首相まで」と題してお話いたします。よろしくお願ひします。

第2部

「柔道を通じた日露交流を語る

— 松前重義博士から

プーチン首相まで—

山下泰裕

(NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、東海大学理事、副学長、体育学部長)

常日ごろから本法人をご支援賜り、ありがとうございます。今日はまた年末のご多忙の中に多数お集りいただき、重ねて感謝申し上げます。木村先生、寺澤先生、貴重なお話をありがとうございます。

お二方の先生にご協力いただき、石巻で柔道教室を開催いたしました。これからも我々の本法人でできることは精一杯やっていきたいと思っておりますので、今後とも協力をお願いいたします。

先ほど木村先生のお話にもありましたが、震災直後にロシアの友人から連絡が来ました。ロシアでも柔道を中心にスポーツマンから義援金を送りたいので、お前の口座を作れることでした。ロシアもそうです、柔道に限らず世界中のスポーツ、文化、芸術など様々な分野の方々から震災に対して熱心なご支援をいただきました。一日も早く東日本が震災から建ち上がることを心から願っておりますし、日本人が皆、心をひとつにして行動を起こしていくことが大事だと考えています。

今日は、柔道を通じた日露交流についてお話しします。多くの会員の方や協賛して下さる企業の方々のおか

げで今日まで活動を展開しておりますが、その大きな柱のひとつが日露交流です。なかなか普段はお話できないような内容もありますが、ご支援していただいているの方々にはそのようなお話をしていいのではないかと思います。今日はこのような場を設けさせていただきました。

松前重義博士のこと

我々が国際交流をする際、まず避けて通れないのが東海大学創立者の松前重義先生の存在です。松前先生は熊本県のご出身で、柔道をこよなく愛しておられました。後から聞きますと、私のことを孫のように思つて下さっていたようで、様々な経験を私にさせて下さいました。

先生が亡くなられる前に何度かおつしやつたのは、「山下君、僕が今まで君を応援して来たのは、試合で勝つてほしいだけじゃなかったんだよ。君には日本で生まれ育つた柔道を通して世界と友好・親善を深めてほしい。それだけではない。スポーツを通して世界平和に貢献できる人間になつてほしい。そんな思いで君を応援して来た僕の気持ちをお分かってほしい」ということでした。

若かりし頃は、頭では分かっていても私に何ができるか分かりませんでした。しかし多くの人の力を得て、今こうしてNPO法人柔道教育ソリダリティーを立ち上げて活動しています。先生が私を育てて下さった愛情に対し、ほんのわずかでもお返しできているのかなと思いますし、いつも後ろから見守って下さっているような気がします。また、先生ならこのような時にどうするかなどと、物事を考えることもあります。

先生は時に私に「なぜロシアと交流しているか分かるか？」と問われることがありました。もちろん、私には分かりません。先生は「僕は共産主義・社会主義には反対だ。僕の主義とは相容れない。が、日本海を隔ててすぐ目の前にはソ連という大国がある。しかし今の日本は、学術も文化も皆アメリカの方がかり見ている。何かあった時にこの状況では日本が行き詰まるのではないか。だから、ほんのわずかでも学術・文化・芸術・スポーツの交流でソ連とのパイプを持つておく必要がある。そうでないと、日本は大きなダメージを受けることになるのではないか。それで僕は日本対外文化協会を立ち上げて細々だ

がソ連とのパイプを作っているんだよ」と、そんな話もされました。

もうひとつ思い出しますのは、今から31年前のモスクワオリンピックのことで。日本はオリンピックをボイコットしました。私は松前先生から次のオリンピックのチャンスもあるだろうから一緒に見に行こうと誘われ、モスクワにオリンピックの視察に行きました。松前先生は、現地で当時、ソ連の日本政策を全て決定する日本部長のイワン・コワレンコさんとい

へん重要な会談をされました。このとき、実は私も一緒に行こうと声をかけられました。モスクワオリンピックには私の恩師である佐藤宣実践先生、猪熊功先生も一緒でした。当然3人で行くものと思っておりましたら、こちらからは松前総長と通訳、そして秘書と私だけ。その場には猪熊先生も佐藤先生もおられません。でした。正直申しまして、私は当時23歳でしたから、どうして私がその場にいたのかさっぱり分かりませんでした。終わった後、秘書の方から言われました。「山下君、何で君がここにいたのか分かる？ それはね、いつかあなたに松前先生がやっているような役割を、スポーツを通じた国際

交流で担ってほしい。そのために少しでも何かを経験させたい。そう思った思いで松前先生はあなたをあえてこのようなソ連との重要な交渉の場で経験を積ませたのだと思うよ」と。

今、お話しして当時のことを思い出しました。そのような松前先生ですから、東海大学では国際友好交流・友好親善・異文化交流などの言葉がいつも聞かれていました。そういう環境の中で私も育ってきましたので、選手時代も全日本監督時代も相手は決して戦う「敵」ではなかったんですね。ライバルであり畳の上で戦

つても、柔道で同じ目標に向かって頑張る仲間であるとの思いで接してきました。全日本の監督時代にロシアで日露合同合宿を行ったとき、ロシア側のコーチ陣からサウナに誘われました。ロシアでは「バーニャ」というのですが、サウナから上がって目の前のエニセイ川で水浴びをした後、ウオッカを飲みながらスポーツ談義を楽しみました。我々は畳の上では戦っても離れたら仲間である、そんな思いで現役時代も過ごしてきました。プーチン首相との交流についても、このような選手時代からの交流が多

いに役立っていると思います。

ロシアだけではありません。フランスも韓国も同様です。中国とも、こと柔道関係者においては私が一番心通う仲間が多いと思っています。今後はロシアに限らず、世界の多くの国との交流を大事にしたいと考えています。

プーチン首相との出会い

1999年、当時ロシアの柔道協会会長で私の友人でもあるウラジミール・シエスタコフという人物から、その前年に手紙が来ました。「山下さん、私ともう一人よかつたらウラジミール・プーチンの二人に柔道着をプレゼントしてくれないか」と。「分かった。来年1月のロシア国際大会に行く日本のナショナルチームのコーチに持って行ってもらおう」と話しました。

同じウラジミールなので、私はシエスタコフの親戚だろうと思ったのです。日本から行くコーチに話し、柔道着を2着託しました。試合当日、物々しい警備の中で会場は緊張感に包まれ、当時は大統領代行だったプーチンが大会を観にきました。そこでセレモニーが始まり、「偉大なる世界最強の柔道家から、偉大なるロシアの

政治家への大切なプレゼントがあり「ます」とのアナウンスが流れましたが、日本側はまったく何も分からない。日本のコーチが前に出され、そこで相手が初めて当時、大統領代行だったウラジミール・プーチンだと分かったわけです。

その後、プーチンは大統領として2000年9月に日本を訪問しました。半日時間があり、通常は日本の先端技術などを見学するところ、プーチン大統領はぜひにと講道館を訪問されました。この時、私は初めてプーチン大統領に会ったのです。

実はこの訪問の後、プーチン大統領は羽田から会議のためニューヨークに向かうことになっており、外務省からは「プーチン首相にはできれば柔道着は着てほしくない、着てしまおうとどうスケジュールが変わるか分からないから」との話がありました。道路を止めることなど全て決まっていたのです。できるだけその意向に沿って進めようと思っておりましたが、私が迎えに行ってみると、なんとご自分で柔道着を持っておられました。

最初の言葉は、「どこで着替えたらいいか」。そこで「着替えていただくわ

けにはいきません」とはさすがに言えず、更衣室にご案内して講道館の道場で当時の森首相とも会っていただいたわけです。その後、デモンストレーションでのプーチン首相と、当時6段だった講道館館長とのやり取りがたいへん心に残っています。その場には誰しもがプーチンの言葉を忘れな

気まずい空気が流れ始めたタイミングで、プーチン首相は「私は柔道家です。私は6段の重みはよく分かっています。残念ながらまだ私のレベルは6段に達していません。帰ったらもっともつと稽古をして、早くこの帯を締められるようになりたい」と言ったのです。これには、一同参りました。一流の政治家というのは、言葉で人々の心を掴むのだと実感しました。もちろん、行動が伴わなければ期待は失望に変わるでしょう。私にとって最初のプーチン大統領との出会いは、そのように強烈なものでした。

冒頭に「講道館に来ると我が家に帰って来たように思います。これは私だけではなく世界中の柔道家も同じでしょう。なぜなら、私たちにとって講道館は第二の故郷だからです。柔道が世界に広がったのは素晴らしいことですが、もつと大切なことは柔道を通して日本の文化が世界に広がっていることです。今日、私はゲストではありません。私は柔道の仲間であり、隣にいる森さんはボールゲームの人と聞いていますから、今日のゲストは森さんでしょう」と。そして最後に、嘉納行光講道館館長がプーチン首相に6段の証書を手渡し、

二回目にお会いしたのは、プーチン大統領が世界の柔道家を招いて大会を主催したいとのことで、「プーチン杯」を開催した時のことです。日本も招かれ、私が団長として訪問しました。プーチン大統領は熱心に練習をしており、ロシアに花を持たせたわけでは無いのですが、決勝で競りに競って結果的にロシアが勝ちました。プーチン大統領もたいへん喜びました。

きました。後にロシアの友人に聞いたところ、同時に4つのパーティが開かれていたとのこと。ひとつは駐車場など現場の方々の慰労会。もうひとつはロシアの柔道関係役員や審判などの会。そしてそこに集まったロシアのVIPの会。そしてもうひとつが、我々のように世界から参加した方々の会でした。大統領は全ての会に顔を出し、最後に我々の会にみえたのです。

私も9月に講道館を訪問していただいた御礼を申し上げようとズラッと並んだ列に加わりました。私がウオッカを持って「ザ・ズダローヴィエ（乾杯！）」と言いましたら、ニコツと笑って「カンバイ」と言われました。もつと話をしたかったのですが、後ろにも人がたくさん並んでいましたので、二回目にお会いしたのは短時間となりましたが、強烈な印象として残っています。

日本とロシアの橋渡しとして

その後、私の活動は自分でも予想しない方向にだんだんと変わってきました。

紅白の帯を渡しました。プーチン首相は黒帯をしています。正式には7段から8段までは紅白の帯なので、「これを締めて下さい」と。ところがプーチン首相は断りました。会場に

その後、パーティがあり、大統領もみえるとのことだったので、待てど暮らせど来ない。1時間ほどもしたところで、プーチン大統領が入って

きつかけは2002年11月に当時の欧州局長で現フランス大使の斉藤泰

雄さんとロシア課長で現欧州局参事官の上月豊久さんのお二人から、「プーチン大統領は柔道が好きなので、できれば来年1月に小泉首相（当時、以下同）が訪露するにあたってのアドバイスをいただきたい」とのことでした。

後に知ったところによると、私もかわいがっていたいただいた橋本龍太郎元総理から、APECで会った小泉首相との邂逅があまり良い雰囲気とはいえなかったとのことで、「プーチンは柔道が好きというから、良い土産話ができないものか。山下のところに行つて聞いてみたらどうか」とアドバイスがあったとのことでした。

斉藤・上月両氏と食事をしながら、1月に小泉首相が訪露して会談をする時に柔道に関する話を三つしましようという話になりました。ひとつは、2004年のアテネ五輪に向けて日露合同合宿を開きましようというもの。日本側では山下が対応する。もうひとつは、2003年5月終わりにサンクトペテルブルグで遷都300年のフェアが開催されるにあたり、山下も同行しようというもの。プーチン大統領が出た柔道場で一緒に首脳会談をやるというものです。三

つ目は、当時プーチン大統領が『プーチンと柔道しよう』という本を出しており、イタリアとドイツで訳出されていましたが、チャンスがあればぜひ日本語でも出し、帯には山下が推薦文を書こうというものでした。

柔道はプーチン大統領と話をする時にはとても良い話題なのではないかということになり、小泉・プーチン両首脳の会談がプーチン大統領出身の柔道場で行われたわけですが、私がロシアの選手たちに柔道の指導をしている時にお二人がお見えになるということになりました。遷都300年のイベントには世界各国から首脳が集まりましたが、個別に首脳会談ができたのはプシユ米大統領と小泉首相だけだったとのことでした。これが、私とプーチン大統領との三度目の出会いでした。

その後、さらに私の予想しないことが起こりました。

小川郷太郎大使がいらつしやる前で恐縮ですが、外務省はいよいよ加減だなあと考えたものです。私がロシアと日本の賢人会メンバーに選ばれたのですから。小泉・プーチン会談で、両国の賢人が集いどのように交流していくか議論していこうと設けられた

ものでした。会長は当時の森総理、ロシア側はモスクワのユーリ・ルシコフ市長、日本側6人のメンバーの中に経団連の奥田碩会長（当時）もおられました。何と私も選ばれたのです。会議のたびにいつも「私がここにいるのだろうか」と思ったものです。柔道関係者に話しますといつも「え？ 日露ケンジン？ お前は熊本県人だろう」と。どこから見ても賢人には見えないというわけですが、私にとつてはたいへん貴重な経験となりました。

ここでひとつ補足しますと、首脳会談の前日、NHKの朝の番組「おはよう！ 日本」で小林和夫さんがプーチン大統領に独占インタビューした様子が放映されました。プーチン大統領の別邸には専用の柔道場があるので、その入り口には嘉納治五郎柔道創始者のブロンズ像が置いてある。そのインタビューの中で小林さんが「たいへん恥ずかしい思いをした」とおっしゃいました。プーチン大統領はたまの休みに別邸を訪れて柔道の練習をするらしいのですが、「道場にどうぞ」と言われたので小林さんはスーツと入って行ったところ、後から来たプーチン大統領は深々と道

場に向かつて礼をしてから入つてこられた。あのときくらい恥ずかしいことはなかったと。道場を出るとき、小林さんは今までのことはなくらい丁寧な道場に向かつて礼をして道場を出た、とそんな話でした。

日露の交流の中で私の切り口はあくまでも柔道なのですが、どんどん巻き込まれて行きました。2005年にプーチン大統領が再度日本を訪れました。翌日が小泉首相との会談で、私もお会いしました。反対側には世界のマスコミがたくさんいましたが、そこで私の宝物をプーチン大統領にお渡ししました。嘉納治五郎師範が書かれた柔道の理念である「自他共栄」です。これをお見せして、「日本とロシアが共に協力しながら発展することを願って大統領にプレゼントします」とお話ししました。これは柔道にかかわりない人には価値のないものですが、プーチン大統領はたいへん驚きました。その時の言葉がたいへん愉快でした。「これはコピーですか？ 本物ですか？」と。

ちよつと胸を張って、「もちろん、本物です」と申し上げますと「これは僕だけのものにはできない」ということで、全く予定外でしたが、ロシア側が

用意した夕食会に招かれました。六本木ヒルズのステーキハウスで7人程度の会でしたが、プーチン大統領が召し上がったのは特別に注文した鮭だけでした。私が伺った時にはメニューを熱心に眺められながら注文していました。周りがシャンパンやワインを飲んでいたところ、プーチン大統領は熱燗です。外国の人が日本酒の熱燗を飲むところはあまり見たことはありませんが、後に聞くとロシアでも日本食が流行っているということですから、寒い時期に熱燗を飲むのは粹なことなのかもしれません。私が大統領に「暖かいお酒がお好きですか？」と聞きました。日本よりほかに寒いロシアからみえているわけですが、「いやあ山下さん、寒い時にはこれが身体が温まるんだよ」と。帰られてすぐ、私に招待状が届きました。書のプレゼントに対する返礼だと思えますが、「あなたと私で共に柔道着を着て子どもたちを指導する機会を持ちたい。それをDVDに収録してロシアでの柔道普及につなげたい」ということでした。「あなたも私もちよつと歳を取っているので、若い選手を連れて来てくれるとありがたい」とのことでした。

これはその時、小泉・プーチン会談があった同じ道場で、子どもたちの指導が終わった時に井上康生も一緒に撮った写真です。私と大統領が握手するところをちよつと撮っています。この後、私たちは大統領に招かれてイタリアアンレストランに行きました。個室ではなくたいへんにぎやかなところで、「こんなところで大丈夫なのかな」と思ったほどです。1時間半ほど食事を楽しみ、お見送りをして食事をした部屋に戻ると、なんと誰もいません。皆さん、全員がサクラだったのかもしれない。

私と井上康生とロシア側がプーチン大統領はじめロシア側が5人でしたが、その時の大統領のスピーチもたいへん印象に残っています。「山下さん、日本とロシアの間には前々からの難しい問題がありますが、この問題以外には何も問題がありません。今後にも、これ以外の問題を作るつもりは全くありません。だから何も心配しないで下さい。この難しい問題を、両国で知恵を絞って解決すれば何も問題はなくなりません。さあ、乾杯しましょう！」と食事が始まりました。このとき、隣に座っていたのが今の大統領であるメドベージェフ第一副首

相兼ガスプロム会長(当時)です。食事が終わった後にその食事の様子をサントペテルブルグの総領事に報告申し上げましたところ、総領事から「え！メドベージェフは次期大統領の最有力候補ですよ！」と。私は「いえ、間違いでしょう。そんな人ではありません」と言いました。当時、43歳くらいだったのでしょうか、ニコニコと一言もお話になりませんでした。私が抱いていた次期大統領とのイメージとは全く違いましたが、翌日写真を見せられて、「この人です」ということでした。

私もロシアといろいろな交流をしています。私もロシアと知恵を絞って解決し、お互いに信頼できるパートナーになってほしいとの思いです。それが少しでも大統領にご理解いただけたのかなと思います。

幻の五輪チームと共に

2008年5月には、1980年のモスクワオリンピックに日本代表として参加するはずでできなかった幻の日本代表チーム7名のうち6名がモスクワに行こうという話になりました。我々が戦うはずだった会場を見て欲しいし、かつてのライバルとも会いたい。

向こうが希望するなら柔道着を着て指導してもいいとの話になり、本法人が準備をしました。

モスクワでは皆、老体にむち打って2日間の指導をし、DVDに収めました。そのとき、私はひとつのお願いをしました。「私はもう三回も会っているが、他のメンバーが1分でもいいからプーチン大統領にお会いできる時間を取ってほしい」と。いつもはプーチン大統領の友人であるとのこと、私に対して笑顔の友人が、難しい顔をしました。「この次期は一番タイミングが悪い。大統領から首相になった次期で、最善を尽くすが難しい」と。

現地に着きましたら、「大切なお知らせがあります。明日の夕食会は場所が代わり、迎賓館でプーチン首相主催の夕食会になります」と。ですから、プーチン首相を囲み、かつての幻の選手たちが揃って楽しいひとときを過ごさせていただきました。

このときに間に入っていたワシリー・シエスタコフは大統領の友人と一緒に本を出しています。大統領の柔道の恩師です。その翌日、大統領は組閣名簿を発表しました。「やっぱり余裕があるな」と思ったものです。組閣名簿を出す前日にこんな

夕食会をして下さるなんて、普通はあり得ません。ステーキハウスでロシア側の食事会に招かれた時にも、「そうだ、日本の大使も呼ぼう」ということで翌日の首脳会談の打ち合わせをするはずだった野村大使が急きょ総理官邸から呼ばれて食事会に来ました。普通はそんな風に余裕がないものなのです。

これが前に話しましたプーチン大統領が書かれた『プーチンと柔道でしょう』という本です。これを出された時には、まだ大統領になるとは思っていなかったようです。その日本語版に私が推薦文を書くという話を2000年にしたわけですが、現在ではイタリア語、ドイツ語、フランス語、英語で翻訳されています。なかなかタイピングがありませんでしたが、日本語でも翻訳し、私と小林和夫さんの二人が見たプーチン首相についての記事も加え、日本では『プーチンと柔道の心』というタイトルで朝日新聞社から出ています。

が、5月11日にプーチンは首相として初めて日本に來られました。11日に出版記念パーティに出られて出立されたわけですが、後に聞くところではプーチン首相の日本滞在は24時間だったとのこと。5月11日の夜10時に羽田空港に着き、翌日の夜10時、麻生首相との晩餐会が終わつてまっすぐ羽田からモンゴルのウランバートルへ発せられるとのことでした。4月末に私のところに来た連絡では、「プーチン首相は出版記念パーティに出席する。12日夜10時からやろう」とのことでした。どう返したらよいか分からず外務省に相談しましたが、外務省もまだ知らないことでした。「12日10時には羽田を発することになつています」と。私も間違いだと思いましたが、実際にプーチン首相がモンゴルに向けて出発したのは13日の朝10時でした。

ケジュールの中でご出席いただいたのは、たいへんありがたいことでした。ただ、やはり周りのお付きの人の緊張感にはすごいものがありました。いろいろな方からお花をいただきましたが、プーチン首相がみえる2時間前くらいにお付きの人たちが来て、「百合の花の匂いがきつい。首相は気に入らないかもしれない」とのことです。全部どかしました。また出版記念に併せて東海大学から博士号を贈呈しようとの話がありました。贈呈しようとの話は聞いたが受け取るとは言っていない。朝からのスケジュールでお疲れかもしれませんが、首相が手を出さなかつたら受け取らないと思つてほしい」とのことです。その時には私が代わりに受け取るうとのことでしたが、そのように周りの反応は過剰ともいえるものでした。

プーチン首相は小一時間滞在され、玄関までお見送りしましたが、そこで「山下と二人で話をしよう」とのことになりました。実はそのとき、私はたいへんなプレッシャーがかかっていました。日本オリンピック協会から「プーチン首相にぜひ2016年度の五輪日本誘致を応援してほしい」とのことでした。パーティの場ではなかなかそういう話が出来ず仕方ないと思つていたところの話でしたので、私の教え子の浅井君を通訳にして、向こう側はロシア側の通訳とガスプロムの社長と30分ほど話をしました。これはいいタイミングだと思ひ、私がありました。「実はひとつお願いがあります」と言いましたら、ゆつたり座つていたのが急にグツと身を乗り出しました。「東京の五輪誘致を応援してほしい」と言いましたら、笑顔で話していたのが急に真顔になり、通訳に向かつて「きちんと記録しておくように」と言いました。もちろん、ジェスチャーだけのことだったかもしれませんが、そのように真摯に受け止めていただけたのはたいへんありがたいことだと思ひました。

プーチン大統領の来日に間に合えば、必ずプーチン大統領は出版記念パーティに来てくれるはずだと三井物産の関係者の方々にもご協力をいただきました。本は4月に出版した

その前の4月29日に全日本柔道選手権があり、朝青龍が見に来ていきましたが、「山下さん、困るよ。あなたのおかげでプーチン首相がモンゴルに来るのが1日遅くなったじゃないか」と。「えー！ 何で知ってるの？」と言つたら「俺はモンゴル大統領とは親しいんだ」と。そのように慌ただしいス

が、プーチン首相はご機嫌で麻生首相との会談の話も出て、最後に「今日は東海大学から名誉ある博士号をいただいた。これは今後も日露交流のためにもっとも汗をかけたということだと思ふ。これからも努力して行きたい」とのことでした。やはり政治家は言葉で人の心を掴むのが上手なのだと思ひました。

深まりゆくロシアとの交流

その頃から分かってきましたが、日本でもどこでもトップが喜ぶ情報というのは誰しも上に上げたがる。トップの機嫌が良い方が、いろいろなことがうまく進むのです。本法人の会員の方々、協賛して下さる企業の方々から力をいただいて活動しているわけですが、細々とした活動であつてもプーチン首相が喜ぶ話であれば上まで上がってしまうのです。そういう意味では、このような地道な活動でも効果があるのかなと思います。

嘉納治五郎師範の書を渡した時でも、プーチン首相から真つ先に出たのは、「テロで傷ついた北オセチア・ベスランの柔道家を招待して励ましてくれると聞いています。ロシア国民を代表して心から御礼を申し上げたい」との言葉でした。それは12月の話で、お会いしたのは11月ですから、まだ実現もしていない。「え！ 何でそんなことまで知っているのだろう」と。柔道というのは、多少は日露交流に役立つ部分もあるかと思つています。

昨年の3月に三井物産のサンクトペテルブルグ大学の冠講座にお招きいただいたおりには、プーチン首相サイ

ドから「ぜひ会いたい、ついでに1日早く来い」とのことでした。いくらなんでもできるものではありません。インドで原子力発電の契約があるので行かなくてはならないと、次には戻つて来たらサンクトペテルブルグ大学の講座の時に会おうとのことでした。それも講座をやらずにお会いする訳にもいかず、お断りしましたら「首脳の申し出を二度も断るとは何事か」とお叱りを受けました。三度目の申し出は、講座が終わつてから大統領官邸で会おうということでした。そこでの会談の様子です。

なんと9時に間に合うよう、サンクトペテルブルグでもモスクワでも雪道をロシアの警察の先導でバンバン飛ばして行きましたが、お会いできたのは11時半でした。到着してから2時間半待たれたのです。私も、間に立っていたシエスタコフもプーチン首相はもう帰ってしまっただろうと思つて、うつらうつらしていましたら、「お待ちせしました。今、空きましたので」と執務室に案内されました。

後にお聞きしましたら、全部の仕事が終わつてから会いたいとのことだったようです。プーチン首相は、夜は非常に強いようです。

お会いする度に柔道の話しがしませんが、今度もそれではしようがないと思ひ、思い切つて「日露が本当の友人になることを願っている、この私に何ができるかと聞いてみよう」と思っていました。が、出てきた言葉は「日本は政権が変わりました。今まで以上に日露の関係が改善させることを願っています」でした。それからかなり熱くプーチン首相は語られ、その時の通訳はイリシエフさんというとても日本語が上手な方らしいのですが、あまりよく分かりません。もしかするとあまり良いことではないのは通訳されなかったのかもしれない。その後、シエスタコフに内容を確かめて大使館に連絡しました。大使館からは「山下さん、日本のマスコミにプーチン首相と会ったことは流しますか？」と聞かれまして、「面倒だから黙つておいてほしい」とお話ししたので、何と翌日のプーチン首相のホームページにこの写真が載りました。そんなこともありまして。

2007年から3年間で、外務省にご支援いただきロシア側から柔道関係者を招待しました。北オセチア・ベスランから招いたのは、テロによる銃弾で両親を失つたりまだ体内に弾が残

つていたりする子らでした。また、サンクトペテルブルグとの交流では、「ぜひ福島の選手を招待したい」とのメールが届いています。おそらく、ベスランのチームを招待し励ましたことに対する返礼なのだと思います。

これがテロで300名以上の子どもたちが亡くなった学校です。ここに本法人から畳を贈呈しました。このようなことも全てロシアではテレビで放映されます。私だけでなく、井上先生、柏崎克彦先生などいろいろな指導者を派遣しています。また、アナトーリー・ラフリン先生をお招きしてのご講演も、たいへん好評をいただきました。

また、この11月からは来年5月まで2人の指導者をロシアから受け入れます。本来は3月からでしたが、震災と原発の問題で遅れていたものです。これは、ラフリン先生から「せっかく指導していただいてもロシアに帰ると指導者はすぐ忘れてしまう。だから次代を担う若い女性指導者をぜひ受け入れていただき、柔道の心や日本の文化など様々なものを学んで帰って来てほしい」と伺い、その思いから実現したことです。

さて、最後になりましたが、プーチ

ン首相はたいへん柔道が好きで私にも親しみを持って下さる理由について、少し触れたいと思います。私が世界的な柔道家だからと思われる方が大半と思いますが、プー

チン首相の柔道家仲間の多くが選手だった冷戦時代、東海大学を訪れているのです。当時はどこに行ってもあまり歓迎されなかったのが、東海大では暖かく迎えてくれ、「その中心には山下がいた」というのです。ロシアの柔道家の日本柔道や東海柔道に対する思いの中には、全部山下がいるのです。それが、首相が私に親しみを持ってくれている大きな理由だと思っています。

ロシアは隣国であり大国です。両国がお互いに理解し、協力し、日露のみならず世界平和のために協力し合う時代がくれば良いと思っています。柔道は小さな活動ですが、私はこれからもこの切り口で交流を進めて行きたいと思えます。

まとまらない話でしたが、熱心にお聞きいただいたことに心から感謝して、話を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

— ありがとうございます。本日

は第一部、第二部と異なるタイトル・内容のお話をいただきました。いずれも皆様の心の中に残していただければと思います。

さて、本日はたくさんの方のおみえになっておられますので、この機会に震災の影響で受け入れが延期されていた、海外から研修にみえてくる指導者や選手の方々をご紹介いたします。震災の影響で延期になっておりました来日が、12月になつてようやく実現したものです。今回は、イスラエル、パレスチナ、アフガニスタンからいらつしやっています。

私の隣から、イスラエルから参りましたアデイエルさんです。12月の14日まで滞在し、大会などの研修をします。将来はお父さまがイスラエルで経営されている柔道場でコーチとして活躍されたいとのことです。真ん中が、パレスチナからみえたカリッドさんです。パレスチナでシニア・ナショナルコーチを務められ、国際審判員の資格もお持ちです。海外経験はたいへん豊富でいらつしやいますが日本は初めてとのこと。

最後に、アフガニスタンからいらしたフアヒマさんという女性をご紹介します。彼女のことを知りましたのは

3年前のことになります。橋本副理事長が読んでいた毎日新聞の朝刊に彼女の記事が掲載されており、オリンピックを目指してアフガニスタンで柔道の練習をしていたものの、なかなか思うような練習環境が得られず、隣国のパキスタンで練習しているとのことでした。「将来は柔道を通してアフガニスタンに平和をもたらしたい」とのこと、いつかは東海大学にお招きしたいと考えていたものが、今年やつと実現しました。私たちは彼女を探すことから始め、やつと見つけましたので、本法人としてもたいへんうれしい出会いです。2人の女性ロシア人コーチと共に5月末まで半年間、東海大学で研修する予定です。

以上、本日はたいへんお忙しい中、多くの皆さまにご参加たまわりまして、心より感謝申し上げます。ここで、あらためて寺澤・木村両先生にあらためて拍手を。両先生とも、これからますますご多忙のことと思いますが、ご自愛されてご活躍下さい。

* * *

柔道教育ソリダリティーのバックナンバー講演録をご要望の方は、事務局 0463-58-1211(内線 3524)までご連絡下さい。講演録は、無料で配布しております。また、ホームページからもダウンロードすることが出来ます。

<http://npo-jks.jp>